文字と支那の社會

後藤朝太郎

一　緒言

支那の社會狀態のことに就ては皆さんの中には既に支那の地に渡られ實地に支那社會の事情に通じて居らつしやる方もありませうし、又新聞雜誌書物等に受て支那の社會の狀態の一般を御承知の方もありませうから、今更事新しく申上げる程のこともないかと思ひますが、文字の方面から見た支那の社會と云ふ意味で、自分の平素專門として取扱つて居る方面のことを出發点として、少々愚見を述べて御敎示を仰ぎたいと思ひます。

文字から見た支那の社會と申しますと、是は見る人に依つて十人十色でありませう。非常に支那を有難い國と云ふ風に見る方もありませうし、又現在の支那の狀態と文字との關係を考へて見るとイヤになつてしまふと云ふやうに見られる方もあるだらうと思ひますが、私の考では支那の社會は其全體が文字の中毒に罹つて居る。既に罹つてしまつたもの。今日の支那は其結果を社會の各方面のことに現して居るのだと云ふ風に見るべきであると思ふのであります。支那の社會が中毒に罹つて居るのは、獨り文字に於てのみならず、是迄に阿片の中毒に罹つて國運を危くしたことを自覺するに至つたことは、皆さん

の御存知の通りであります。其外經學の中毒、つまり經書の學問の形式的方面にのみ走り、爲に支那の社會全体といふものが萎靡してしまつたと云ふ顯著な事實があるのであります。さればこゝに文字だけを特に揚げ玉に擧げれて惡く申すことは出來ぬわけでありますが、今日は此文字と社會との關係上文字中毒に罹つて居る顯著な點に付て御話を致したいと思ひます。

言ふまでもなく支那人は形式に凝る、其凝り方といふものは日本人などの到底實行は固より想像だにも及ばない位、過度に、又驚くべき程に凝りかたまるのであります。其國民性から云つても支那人の嗜好に文字は最も調和をして居るものであります。支那人の考になつて考へて見ると、支那の萬餘の複雜不便な文字といふものは嬉しくて堪らぬと云ふやうな關係になつて居るのだらうと思はれます。日本人は此の点から云つてどうかと云ふと、一般に日本人は讀書人でない。從つて思想に耽るとか、文字に凝りると云ふことは一般の性質ではあるまいと考へる。それよりも、寧ろ青竹を二つに割つた式の薩張りした恬淡なる性質を有し且簡單で清らかな氣持を持つと云ふのが日本人の一般の特色であると考へるのであります。支那人はさうでない。青竹式でなくて極く細かな微妙な點に迄情緒を馳せる傾がある。例へば文學上の事であつても又經學の方面のことであつても、總て情緒の方面に支那人は非常に發達して居るのであります。さう云ふ點から見まして、此文字の文章の綾を尊ぶと云ふことが支那の國民性に最も調和して居ると考へられるのであります。さう云ふ國民の全般の特性から考へると云ふと、支那の今日

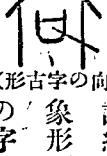
庸熙字典の如き字引に載つて居ります所の五萬六千有餘のたくさんの文字が、總て殘らず支那人の根抵の深い情緒的の趣味性から生れ出てゐるものであると論斷することが出來るのであります。

二　支那文字の最初の狀態

支那の文字の起源のことに就いては今日未だ充分なる科學的の研究は出來て居ませぬけれども、少なくとも今から三千年以上、是は四千年かも分らぬ、五千年かも分りませぬが、兎に角非常に古い時代からして既に支那民族の間に今日の支那文字の元始形式を備へた文字が發達して居つた事が事實であるのであります。それには確實なる考古學的材料がたくさんあるのであります。其材料は實物として今支那の河南省で黃河の北にあたる地方でありますが彰德府の近在安陽河畔の一小屯からして出る所の龜の甲、獸骨の類がそれであります。之れが既にもう數萬個出て居りますが、その龜甲獸骨は殷の時代に當時の人々が龜卜をする時分に用ひて居つたものであります。其龜甲獸骨には一々當時の書體で以て龜卜の言葉が刻されて居る。其裏側には楕圓形又は圓形の溝が堀られてあつて、其側を火で灼いた迹がついてゐるのであります。そして反對の側即ち表面の方には恰もトの字の如き形をした龜裂が生じてゐる。その龜卜文辭によると當時の人が例へば何日に獵に出掛けやう、其時に雨が降るか降らないか、どういふ物が獲られるか、又往來に災が有るか無いか、或は又結婚問題の如きことすべて色々な問題に就ての龜卜文字が皆此の龜甲獸骨の斷片の上に遺つて居る。又其當時の風俗の一般もそれで分るし、又文字其もの

も元始的である爲め寫生風に構成されてあります爲め如何にも其意味が能く了解されるのであります。此の龜甲獸骨の斷片が殷時代のものであると云ふことに就ての証據は、其堀出された場所が殷の都の墟であると云ふことゝ、それから其文字の形が周時代の一般の文字の形よりもよほど原始的の形式を取つて居ると云ふこと、倒へば繪に全く近い形をしてゐること、埃及で申せばヒエログリフツクの古い時代の繪文字そつくりの形式に書かれて居るのであります。それが周時代に入りますると大分字數も殖えて來てゐますが字形の方も餘程實用向きになつてまゐりました。古い殷の時代の字形は未だ繪畫の域を脱してゐないのであります。それに就いては色々述べたい理由もありますが、兎に角其の文字が殷時代の物であると云ふことは確かなことゝして今日の文字研究界ではきまつてゐるのであります。或はもつと嚴密に云へば殷よりも古い時代のものを當時の龜ト用文字に用ひてゐたのであつたかも知れぬ。何れにしても上に述べた所の河南省の彰德府から出る文字資料は支那文化の上では何よりも古い史的材料になつて居るのであります。其材料に現はれて居る所謂龜ト文字を見ますると云ふと、動物に關するものが一番精密に書かれて居ります。例へば象のやうなもので、是は極く寫生風に肥滿して書かれて居りまして、長い鼻が餘程前の方にズッと伸びてゐます。そうしてその端の方が卷いてゐるやうに描寫されてあります。その他虎もあれば、豹もあります。一々虎や豹の班紋が描入されてゐる。それから馬もあります。馬などは髮と云ひ、蹄と云ひ、尻尾の毛の澤山ある樣子と云ひ、悉皆寫生風に書れてゐるのであり

ます。それから鹿の字もたくさんありますが、此の鹿の字は其角の皮が幾つあつて、どれ丈の長さでどの方向に向いて居るかと云ふことまで一々明瞭に描かれて居る。而かもそれはどこ迄も文章であつて繪ではないのであります。つまりそは前後の文章の續き合ひからして、立派な文字になつてゐることがわかるのであります。斯樣に動物に關する文字が一番鮮かに了解されるのであります。其次は家具類でありますが、是も亦大分形そつくりに描き出されて居ります。そのうちにも炊事要具が多いやうであります。其次には建築物に象つた文字でありますが、是は餘程原始的の形に書き表はされて居ります。例へば門なら門の字にしましても、今書いて居る門の字とはよほど違ふ。今の門の字は柱と扉だけでありまするが、殷時代の門の字は上に横木が通つて居りまして、カブキ門の形を爲して居ります。當時横木の無いものはあつたでありませうけれども、亦斯樣なキチンとカブキモン式の體を爲したものもあつたと云ふことが分るのであります。それから建築物に關係のある文字に於きまして例へば「向」の字でありますが、此「向」の字は



（古字の窓向形）

此向の字の中の口は窓の象形でありまして周圍の輪廓は家の屋根と壁になつて居るのであります。それから又「高」の字に付て見ましても、是は矢張建築物の象形であつて恐らく是は住宅ではなく、城壁の間々に造られて居る物見臺の象形であらうかと思ひます。是は萬里の長城などに行つて見ますとよく解ります。其外又北京あたりの都の周圍の城壁に就て考へて見ても能く見出される

詩經などに使つてある所では、窓と云ふことになつて居りますが、

のでありますが、時としては屋根が二重になつてその重樓の屋根を示してゐることもありますけれども兎に角望樓式の建物の形を示したものであらうかと思ひます。高の字の上半を詳細にしらべて見るとその部分は無論普通の城壁の女牆以上に高く築き上げてある建物を表してゐるのである。城壁と其上に建てられて居る建物と及び下にその入口の象形がある。高所から見晴らしが出來ると云ふので、高いと云ふ意味が 出てゐる。されば高いと云ふことは建物の意味から來てゐるものと思ひます。又此女牆以上に建物の無いこともあるです。其の場合は大抵此の高の字の下半の口が北方蒙古の方に向つて拔けてゐるのでない。支那の方つまり南方に向いた方に口があるのであります。丁度高の字の下半の口のところにあたる所、此處に小さい口がありまして—此萬里の長城に行つて見ると能く 刻るのでありますが、手前の方に誠に小さい入口があつて之に入ると向ふが行詰つて居つて、中に這入つて見るとやつとひとりの身體がはいれる位な狹い穴があつて、其穴が上に拔けてゐる。石段があつて、それから上へ昇ることが出來るやうになつて居る。南の方、つまり支那の方から云つて見ると其の望樓式の城壁はすべて外側には口が付いてゐないのであります。要するに高の字はかくの如く萬里の長城に見る城壁の一部と見ても宜からうと思ひますが、「高」の字の場合には矢張り上に望樓の如き建物が付いて居ると見た方が適當であらうと思ひます。次には「京」の字、是も矢張建物の形から參つて居ります。此建築物の象形文字は上代に餘程たくさんあるのでありま

す。此處には其一例を示したに過ぎないのであります。

次に此處に示してあるのは家の道具と及びその側に人の坐つて居る場合を示したものであります。是には人が一人居る場合と二人居る場合とがありますが、一人居る場合は此「即」と云ふ字になり。二人ゐるときには卿(饗)の字になるのであります。人は右にゐるも左にゐるも義は同じことであります。家具の「豆」(豆)と云へる象形この「豆」といふ字には別に植物の豆を意味したものでなくして高坏の臺の上に御馳走が盛つてあることを示したのであります。「即」の字はもと〳〵人が跪いて居るのを描いたので食物に即く、御馳走に即くと云ふ事を示したのであります。口を開けてるもの口を向ふへそ向けて居るのもあり又後ろへ向けて居るものもあります。又時には「既」の字の如くに食べて濟んだ(笑聲起る)と云ふ事を指示せるものもあります。斯んな風になつて飽食の義を示してゐるのであります。それから又「饗」の字後の文字で云ひますと御馳走の「饗」の字に當る文字、本來これが御馳走の意義であつたと云ふことを忘れられた爲めに、後に「食」を附加へたものであります。この字形は鄉里の鄉の字にも公卿の卿の字にも共通の字で、もとは同一字であります。周禮などにある鄉飲酒の禮とか鄉射禮とか云ふ時の彼の鄉の字の源になるのであります。鄉と卿とは後世はに書別けるやうなことになつてゐるけれども、起源は何れも一つことであります。斯樣に食器を眞ん中に置いて兩方から人が差向ひになつて御馳走を執つて居る古代の風俗を赤裸々に寫してゐるものであります。斯樣に上代の文字は餘程支那人の

意匠を凝して拵へて居ることが判るのであります。支那人の間では上古倉頡と云ふ人が居つて、文字を作つておいて呉れたのだと云ふやうなことを申してゐますけれども、それは今日の學術界では信じられない。太古黄帝の時分に倉頡が天象や鳥獸の足迹を見て文字の制定に着手するに至つたのだと云ふのですけれども、文字はそんなに一人や二人の人の計畫して拵へた所で、そんな人工的のものが廣く民族の間に行はれるものではありませぬ、さう云ふことでなしに、支那の文字はもと上古支那の社會全體が自然と長い歴史を經る間に作り上げたものである。それに違ひないと見るべきであります。さう見るのです。その大体が出來上つた時代は到底分りませぬけれども、上に御話し申上げた通り三千年、四千年、五千年位の古さに置いても宜しからうかと思はれます。如何に支那には之を文獻の上で徵すべきものであつたにしても皆それ以後のものであります。文字の最初の時代はどの邊の時代に持つて來たら宜いか分らぬのです。龜甲文字の中には天子に關する名があります。天子の名とか干支とか云ふものは之に能く刻付けてある。それに依ると殷の時代の天子の名前で歴史に稱するものなども屢見ゐて居るのであります。そのために、先づ殷代のものであると云ふことに斷定されてゐるのであります。けれども實際申しますと、歴史の始まつてからの後の天子であると、その名前と實權とは中々えらいことになる。天子と云ふ名稱そのものが大きい意味になります。けれども、大古有史以前の天子といふものはそれ程のものでなく、地方々々の豪族のやう為ものであつて、後の所謂天子とか君主とか云ふものではなかつたら

うと思はれるのであります。けれども兎に角龜甲文字の上にはさういふ名前が澤山見えて居ります。「祖乙」と云ふ如きその一例であります。是は殷の天子の名前ですが、その祖の字はもと斯う書いてありまが。「且」これは支那の昔の墳墓の形です。後に供物を臺に載せてその前に祭りをするからと云ふ譯で示の字を加へる。「祖」此形式は後世にありますけれども、古は「且」だけで之に乙を加へて天子の名前、祖乙としたのである。斯う云ふものがあるから、丁度之が史記などの所謂殷時代の天子の名に符合するわけであると思はれるのです。だから此の龜甲文字は殷時代のものだと見ても差支ないだらうと云ふ風に云つてゐる學者もあるのであります。けれども、本當のことは今少し古いかも分りませぬ、併し字形の上からすると非常に古い時代のものであると云ふことが分るのでありますし兎に角斯う云ふ文字が龜卜用の龜甲や獸骨に彫付けられてある。そして其材料は偶然にも二十年此方河南省の畎畝の中から非常に澤山發掘されて居るのであります。日本にも一萬近くの斷片が集つて居ります。ひとり日本ばかりでなく露西亞の大學にも參つて居れば、佛蘭西、亞米利加あたりの大學にも大分參つて居るさうであります。餘程物は擴がつて居ります。唯西洋ではまだそれを研究しないで唯籠に入れた儘でしまつてあると云ふことを聞きました。日本では及ばずながら私共は先輩の驥尾に付いて研究をやつて居ります。將來本當の研究が出來て來ると文字の研究に非常な基礎が出來る譯になるのであるし、同時に今迄說文や金文の研究で不十分なところが之に依つて色々確かまるものが澤山あらうし、又同時に壞れるものも

あるであらうと思はれる。兎に角是からの文字の研究は新しい幕に入る譯であるから大變樂しみがある譯であります。支那人はかやうな風に古い時代に既に文字を作つて龜甲の上に使用して居ります。複雜な文字も中々たくさん出來てゐる。龜甲獸骨の文字は吾々の方では龜版文と稱へてゐるのでありますが此の龜版文の次の時代になると鐘鼎文となる。是は例の篆書の時代になります。篆書の中にも大篆があり小篆がある。次いで秦の始皇の頃になりますと秦篆と云ふ、詰り小篆のことを謂ふのですけれども、當時の實際の字体はそれよりも少し形が壞れて參ります。それから隷書が始まり、草書が始まり、楷書が來て、行書が來ると云ふ、かやうな順序になるのですが、兎も角、大元から今日迄　文字の歷史を見て來ますと云ふと、支那民族が如何に能く意匠を凝してこれ程迄の文字にして呉れたと云ふことに就いては萬感交々に至る次第であります。

三　支那文化と文字の繁簡

支那の一般文化の上から申しますと、例へば鑄金（チウキン）のことにしても、織物のことにしても、彫刻のことにしましても、或は文藝、廣い意味に於ける藝術方面のことにしてもすべての方面から見まして、支那の文化方面に現はれてゐる意匠といふものは精巧を極めたもので、非常に緻密に出來あがつてゐる。むしろ度を過して居りはせぬかと思はれる位に有ゆる方面に綿密の極度を發揮してゐる。是は支那の文化のうち最も特筆大書すべき点であると思はれます。書籍の方面で云つて見ても彼の大きな古今圖書集成（トウシウシセイ）

のやうなものを編纂してゐることゝか淵函類鑑（ヒンカンルイカン）とか皇清經解（クワウセイケイカイ）とか云ふやうな、偉い浩瀚なものを澤山編纂して居ります。かくの如きものは支那人の國民性から作り出された作物（アルバイト）と見るべきものでありますが、さういふ物を見ますと、明に支那文化の特色並に支那人自身の特性がアリ〳〵と見ねて來る。それを背景に考へてゐて文字の方を見ますと、支那文化が此の五萬六千と云ふ夥多しい文字を今日迄に作り上げて居るも偶然でないことが分るのであります。

支那人はそれ丈までに文字のことに凝つてゐますが、折角これまで仕上げた文字を今一つ進歩させるに付てはどれ丈の努力をして居るかと云ふことを飜つて考へて見まするに、支那人は一方形式の事を非常にやかましくする。極端に行かれる丈け行く。その代りに、半面に於て急轉直下、餘程融通の利いたどうなつても少しも頓着しないといふことをやる。つまり一方に何處までも形式に凝り、やかましくするが、他面には打つて變つて反對の事を平氣でする。其處が支那人の支那人たる所を發揮してゐるのであります。文字のことで云つて見るとあの通り非常に複雜な、形式に凝つた文字を用ひ、それが爲めに國家が中毒に罹つたと云ふ程であるのである。ところが又その半面に於て日本人も及ばぬ位な漢字の畧体を拵へてどし〳〵之を使用して居る。尤も日本の文字は性質が支那のそれとは違つてゐて、假名と云ふ音文字を作つて居るのでありますが、支那ではそれが全く無い。其代りに普通の漢字を極端に簡單にして居るのである。其例を十ばかり此處へ擧げて見ませう。

劝(勸)　观(觀)　汉(漢)　叹(嘆)　鸡(鷄)　过(過)　还(還)
远(遠)　伝(儒)　か(辨)　罗(羅)　苦(喜)　岁(歳)　罢(罷)

支那人は複雜而倒な漢字を矢張り複雜而倒のものと自覺して居る爲めか斯くの如く畧字を盛んに作つて之をH常使つてゐるのであります。是は無論正式の場合、著述などの時には書きませぬが、手控の如きもの、又俗間で用ゐます所の赤本黄表紙類、子供用の小冊子類を版にしますやうな場合には大抵此式の簡易文字ばかりを使ふのであります。實例は此の類の小本を見てゐますと澤山あります。日本で云ふならば商賣往來とか庭訓往來とか云ふやうなもの、支那の俗間文字といふものは大低此種の字体を覺へるのでそれで用が充たせるのである。現に最近に私が支那南部の田舍を遊歴しましたときに、連れて歩きました兵隊十餘名と途中で色々話をして文字のことを實地に聞いて見ますると、時々私に字を書いて見せる。それが一向に本當の字を書かない、何れも式の畧体文字ばかりでありました。自分の方で本當の字を書いて示し聞き正して見るとそのやうな字は知らぬと云ふ。全く正式の字は讀めないのであります若しそのやうな簡單な字で用が達せるならば、支那の俗間は餘程進んだものである。支那の爲めに結構な次第であります。其處が又表面の形式をやかましく云ふ國民であるが爲めに、少しやかましく堂々たるものを書く場合には古來貴ばれてゐる形式一點張の字体を書く。これはつまりあと戻りをしてゐるのであります。又支那の社會に於ては文字を紅紙に大書して門の左右に掲げることを致す風俗があります

が、是は門聯と云ひまして、必ず毎春毎戸門の左右に之を貼り出すのであります。之を俗に對聯と申して居ります。是は毎年正月に貼替へる、南方の方へ行くと大分減つて居りますけれども、北の方殊に山東方面の田舍では盛んに競爭の姿でやつて居ります。字体も大層綺麗に書くので實に立派に見えるのであります。若し家に不幸のあつた場合には紅紙をやめて黄色か或は藍色かの紙に取換へます。けれども先づ普通は紅紙を用ひるのであります。單に門に掲げるのみならず一々房屋にも亦入口の左右の柱に掲げます。書齋であるとか、應接室であるとか、普通の家族の室の入口すべてズッとやつてゐます。その文言は大抵聖賢の道に適ふやうなことを言つて居たり、又道敎の思想からして財寶の出來ること、子孫の繁榮すること、壽命長く生延びられること、云ふやうなことを美しい文字で掲げるのであります。併し普通は儒敎方面の積善の家には餘慶ありと云ふ式のものを掲げて居るのであります。併しこの文言は唯ホンの表面上掲げてあるだけのことで、事實門の中では博奕も打つて居るし、我利我利の爭ひもしてゐる。隨分利己的の殺風景の事をやつて居るのでありますけれども、其處は支那流で行くのでありますから、唯道路から見えるところに美しい言葉さへ掲げて置けばそれで滿足するのである。その裏面に於て何を行つてゐてもそれを耻とも思はないのであります。實に其の邊は徹底したものであります。兎も角支那人が門聯の上で文字のことを大層几帳面に禮儀正しく表はして居ることは、支那の地に一歩踏込んだものは直ぐそれに氣がつくのであります。支那の社會に於て文字が實際上どの位勢力を得てゐるかと

云ふことがそれで分るのであります。

支那社會は一方に於て斯樣に文字を重くみてやかましくしてゐるかと思ふと、他方に於ては全く反對で前に申したやうに極端な畧字を使つて居る。是は支那の社會に總て兩面の使ひ分けがあると云ふことを証明してゐる所の一の材料となるのでありますが、其畧字に今一つ磨きをかけて一歩進めるときは音字となり大變良くなるのであります。けれども其處までは支那人は苦心しない。一體支那人には斯う云ふことがあるのです。即ち或る目的を立てると、その目的に向つて非常に執念深く執拗く行く場合に依つては非常な打算から來ることもあるが時には隨分大きな犧牲を拂ふことを厭はず又どれ丈の屈辱でも敢へて忍ぶのであります―忍んでゐて其結果を得るに至ると、もうそれで滿足してしまふ。それを今一つ努力して完全なものに仕上げて行かうと云ふことはしないのです、事柄が文字問題からは離れて參りますけれども、支那には後世に見る所の非常な大建築がございます。その大建築と云ふものを例へば御代が一變すると天子が民心を收攬する爲めに全部塗り直すとか非常な建築を起すとかします―起さないにしても根本的に改造することをする。兎に角目覺しいことを成し遂げて人目を新にする。併しそれが一度出來てしまふと夫れ限りである。後は日本のやうに營繕費を支出して何處迄も之が保存を計つて行かうといふことはしないのであります。一遍拵へてしまふと後は壞れ放題に任すのであります。だから北京方面（隆福寺の如きもの）に行つて見ても、又山東省の舊い建物を行つて見ても判る通り破れ掛つた廟

宇、寺院殿堂の如き大建築といふものは一度壞れ掛つたらそれが最後で、殊にその門番をして居る看門（カンメン）（門番）の如きものは、そこに外國人などが見物に來るといふと好機逸すべからずとて屋根にある黄色の大瓦と一枚宛剝して來たり、或は擔端近く並んで居る所の鴟尾鬼龍子（小さい獸類の形をしたもの）の如き物を取つて來て自分の室の机の下などへ匿して置いてある。そして時々參觀人でも來ると件の瓦類を骨董品として賣りつけようとする。試みに看門に向ひ手で首を指しながらそんな事をしたら是だぞと暗示を與へて見るといふと早速に引込ませます。けれども看門連はさういふ方法を行つて小遣錢を得たがつて居ります。そんな風ですから支那では責任を有つべき番人自身が宮殿の一部分を剝ぎ取つて外人に賣りつける。萬里の長城などに行つて見ても其邊の子供が大きな石の煉瓦を城壁中から壞して來て檀那樣買ひませぬか、一つ二弗ですが持つて行きませぬかなどゝ言つて頻りに買はせやうとする。世界の名物の長城も哀れなもので段々壞れて行く一方であります。當局者の方でも之を知らぬのでもないが警戒するといふことも絶對にないらしい。詰り其邊の土民は歴史の遺してくれて居る物を賣つて金にしたらそれ丈利益だといふ風に考へてゐるのであつて、それが爲めに世間からどうといふ制裁があるのか。頗る怪しいものであります。事實何の制裁も行はれては居らないのだらうと思ひます。獨り無教育の土民ばかりではなく、山東省曲阜などに參つて見ましても衍聖公といふやうな孔子廟の本家本元であるといふやうな偉大なる名家にしても同じことであります。政府からして三十萬とか五十萬とかえらい營繕費を

貰ひ受けて居りますけれども、それは個人的に著腹してしまつて妾を置いたり、博奕を打つたりする方にばかり使つて居るといふ事を土地で聞きました。何も營繕一方面のことに使つて居らないといふやうな狀態なのであります。支那思想の淵源とも見るべき孔子の御膝許がこれでありますから大抵他は推して知るべしである。されば何處までも修繕をして昔日の面目を保存して置くといふやうな考は毛頭支那人の頭には無いものと考へても宜からうと思ひます。其代り若し此の次に誰か偉人が出て來て支那の天下を取るとさうでない、人心を收攬する必要から何處で金を融通してするか知らぬけれども非常な財源から金を引出して面目を一新するやうに大建築を始めます。かやうな根本的の事は思ひ切つてやるけれども一般的の修繕を宛てなしにするといふやうな事は支那人の考では出來ないのです。

四、支那最近の新字

以上の考へを以つて文字の場合を推測して見ますと時機さへ到來すれば根本的にやる丈の素質を有つてゐる。現に北京大學の文科大學の某教授で次の如き意見を出してゐるものがあります。支那が若し何時までも漢字を使つて居ると、支那の覺醒は永久に出來ない、本當に眠を覺めさすには斷然漢字を全廢して別の文字を使はせるようにしなければならぬといふことを主唱して新聞にその說を公にして居るものがある位であります。併しこは突飛の說であつて、一向世間では何等それに耳を傾けて居りませぬ。所が別に又今から五六年前民國二年と記憶しまするが支那で音文字を發明した學會がありまする。それ

は政府の交通部教育部からも是認せられて居ると見ゐて、政府と民間との協力で以てその音文字に關する書物を出してあります、それには字母が二十四あります。此處に寫を持つて參りましたから御覽に入れます、日本の假名に稍々似たやうなものでありますけれども、少し拙いやうです、朝鮮の諺文に近いところもある。併しこれはまだ一般に行はれる程にはなつて居ないが今日北京の勸工場邊りに行つて見ますと此の音文字で書上げたお伽噺の小本は色々出來て居りました。

五　支那讀書人と眼に一丁字なき苦力社會

支那人が文章を弄ぶ上に付て色々注意すべきことがあります。上述の如くに支那人はどうも其文字に餘り頭を突込み過ぎて、社會の大勢を忘れて了ふといふやうなことがある。此點は獨り隣國ばかりでなく近くは日本にも稍や其氣味が見出されるやうな氣が致します、支那は日本以上であるといふ丈である支那に行つて見ると、日本で考へるよりも特に切實にそれを感ずる。詰り世界最近の空氣に觸れることなくして、支那だけで暢氣をきめ込んで居る。列國から何等交渉の無い時ならいざ知らず、今日はそんな時代でないことが判つて居さうなものであるのに、何處までも常に一般が文人生活式のことにこれ日も足らずにやつて居る。それが遂に支那の今日を來した譯ではないかと論斷されるのです、御承知の通り支那には讀書人といふ階級がありまして、苦力社會から超越して生活をしてゐる。併し人の財寶をあてにしてゐて何時もブラ〳〵して居る連中である。この讀書人の中から昔であると秀才であるとか、進士

であるとかいふものが出る。それから學者や政治家もこれから出る譯であります。支那人の思想で申しますと政治家政治屋といふのは詰り民の膏血を絞ることを職業としてゐる階級であるから、一般の國民には何等有難くない階級であり又政府は一名怨府といふべきであると考へてゐるのであります、讀書人は文字を弄ぶ階級のものであつて、一般の國民は國民教育の普及してゐない爲め殆ど無智識でゐる。文字に就きての智識は先づないといつてもよい位である。其點は露西亞の教育狀態と餘程能く似て居ります。日本の今日のやうに教育が普及して參りますと縱令車屋であらうとも、ペンキ屋であらうとも其の他下賤な仕事をして居る者であらうとも、毎朝の新聞位は今日では讀める。又自分の名前位は無論書けるやうになつて居ります。けれども、支那の下層の人民は丸で筆を持つたことがない、又筆を執る必要もなかつたのである。自分に名が付いて居るのか譯らないのか極端に言へばそれさへも知らなくても濟むのであります。字を一字知つたからどれ丈の利益があるともきまらず何等字を知らなくとも差支ないといふやうな暢氣な社會でありますから、文字に就ての觀念は毛頭ない、所謂眼に一丁字のなくても恥しくないのであります。因みに眼に一丁字のないといふことは能く世人の言ふことですが、其の連中が國民の大半を占めて居るのであります。一体「一丁字」といふのは、是は餘談でありますが本來間違でありまして、昔は「一个字」（一個字）と斯う書いてあつたのであります。一個の字、一つの文字といふこと、个（箇）字のがどうかして「丁」の字に間違つて來たのであります兎に角支那は全然文字を知らぬ

連中が多い、それ故文字を知つて居る方の連中から申しますると、一體其の文字を知るといふことの動機は、自分が本來相當な青雲の志を得むが爲めである。學問の爲めに文字を知らうとするものは比較的少ない。孰れも皆、物にならうといふ腹心を持つて居る者でありますっそこで若し讀書人にしてその志を得て政治家にでもなると、今度は收斂を事とするから民の怨の目的となるのです、さうなつて來ますと、今度は民の方はお構ひなく上の方の者だけが壟斷をしようといふ傾向になつて來る。中流階級智識階級、といふものが缺けて來る。苦力社會、勞動社會と上の方の極く上流の者だけで支那の社會を成立させることになるのであります。支那は大体に於いて、日本の社會のやうに中堅になる智識階級といふ階級が未だ出來無い爲めに支那に確つかりとした健全な輿論が起り得ない、上流の方では唯豪語したり、高飛車に苦い税金を取り立てることをするばかりである、下の者は唯何時も上を怨んで居るばかりであつて、上下雙方の事情が互に通じてゐませぬ。新聞だつても汎く國民の間に行はれて居るわけでありませぬから、今でも田舍に行つて見ると現朝が清朝であるのか民國に變つてゐたのか、それさへ知らずに居る民がまだ〳〵たくさんゐるといふ話を聞きました。これは事實まだそんなものかも知れませぬ。昨年安徽省の片田舍を私が歩きました時分に、土民に就いて聞いて見た話のうちに、土民の奇問が振つてゐる。「日本にも矢張お月樣がありますか」と言ふことを眞面目に尋ねて居る男がありました。又「晝間は矢張東洋にも太陽が出るのですか」「矢張圓いか」と言うて頻りにそんなことを不思議さうに聞い

て居りました。支那内地の土民の無智文盲の程度はこれ位であつてそれが田舍を組立てゝ居るのであります。一体田舍に這入つて見ると實際御話にならぬのであります、さういふ點から考へて見まするとと支那人が文字を弄ぶを以て國民的特性であるなどゝ言つても、是は極めて小部分に就いての話であつて、偶々其文字といふものが小部分の支那人の趣味に合して居るといふ風に考へられる。延ひては一般支那民族の趣味であると言ひ得られますけれども、支那の讀書人とは極く僅少な數で、其の間に使用してゐる文字を吾々が漢字と呼んで居るのである、と見るのが適當であります。前にも御話した支那讀書人の階級といふものは數にこそ少なけれ文字に何處迄も沒頭して居まして、社會の大勢をまるで忘れてしまつて居たのであります。このことは一は此大政治家が採つて來た政策でありませうが、唯學者といふものは文字を弄ばせて置けば宜しいもので、政治には餘り喙を容れさせずに置く。本當の辣腕家は讀書人學者の上に居るのであります、總べてのことが支那では徹底的に進んで行くのですけれども、文字に眼の眩んだ連中ばかりは文字に沒頭して了つて何處までも政界と殆んど絶縁になり沒交渉になりそして唯文字三昧に入るといふやうになるのであります。それが爲めに、支那は文字があつて國が亡んだといふ批評を下しても、支那人はそれを否むことが出來ないのであります。と申しまするはどんな田舍に行きましても既にも言つたやうに毎戸掲げたる門聯は實に立派であつてその文言も美しい。併しその戸内を見ると全く反對で不潔で亂雜で少しも門聯と調和しない。裏店同然で内部へ這入つて見ると言ふまでも

なく汚くして豚小屋のやうな處に人間が居るのであります。南方の富有な村へ參つて見ましても、家の輪廓だけは立派であるが、一度入つて見ると實に御話にならぬ程不潔のうちが多い。初め自分は北支那はどんなに屋内を清潔にしてゐても塵が天空から來るので、それが爲めに北方の人は不潔を厭はぬものだとばかり思つてゐた。ところが南方へ行つて見ると、山間の潤澤多く極く綺麗な處へ行つて見ても、其處に居る土民は北方のと同じで矢張不潔でありました。斯の如きことは日本人には餘りありませぬことですが、是は南北通じてさういふ風に不潔なのであります。併し不思議に文字だけは非常に美しい。讀書人と言へば文字を能く書きもするし、又文字を弄んで所謂辞令も巧みに使ひ分ける。これも文字を尊ぶといふ讀書人の間の風習から來て居るのであります、國は亡んでも文字の方が大切であるといふ觀念は今でも尙止まずに居るやうであります。最近の支那は留學生が大分海外に出るやうになつて、餘程文字過重の風習が緩んで參りました。現に門聯の如きものは一度留學して歸國した者は掲げない。若い者で外國の空氣に觸れた者は門聯廢止を主張してゐると申して居ります。

六　文字の過重

國家の滅亡をも犧牲にしても文字を尊ぶといふ思想は餘程古くから支那社會の全体を配して居た思想である、これが爲め文弱の氣風を盛んにした。支那はすべて文字萬能であります。北方諸民族が武力を以て侵入して來ても、文で以ていつしか征服して了ふ。これは歴史が既に度々証明して居るのであり

ますが、此の思想は國民全体にしみ亘つて居る。日本は武事を尊重して居りまするが、支那では武事を以て文人以下に置いて見てゐるのである。されば支那では文官になるのが非常な青雲の志を得たことに見て人も自分も賀するのでありますけれども、武官になるといふことは餘り好く言はないのであります。どうも國情が違ふのである爲め、餘程日本の軍國主義、武士氣質の考とは異つて居ります。尤も昨年私の支那旅行中護衛に附いて來た兵隊共の申して居つた所に依ると、斯の中隊長の天兩王さんは安徽省でも資産家の息子だ。軍隊は安武軍倪嗣沖に旨まく取入つて、調練も何も出來ないのだけれども、金力で以て中隊長の位置を買つたのだ。吾々は貧乏な爲め平兵で入つて居る丈のことだと言つて居りました。そこで不斷は此營所で用事があるのかと聞いて見ると調練も何もない。時々家に歸される。併し北京から檢閲官でも來ることがあると、其時は軍服を着て集まつて來るといふことを言つて居りました。尤もその軍服だつて兵隊が銘々自分で買ふのであるから、雨でも降れば直ぐ雨傘を翳して歩く。日が照りつけて暑くなると、服が惡くなると言うて綠色の傘を翳して行くのであります。日本の軍隊ではそんなだらしない事をする者は誰もありはしないと言つた所が、此の軍服は私共銘々で拵へたのだが惡くなると又新調しなくてはならぬのだと言つて居りました。夜路を行くには提灯を提げて歩く。支那南北全体の兵隊がさういふ風であるかどうかは自分は知らないが、兎に角有名な倪嗣沖の膝下の兵隊がこれであります。これでは武事が卑しまれて居るも偶然でないと言ふことを熟々感じました。餘りに實際の狀態

がひどいので私は尠からず驚かされました。其の他金錢の問題に付ても支那では一般がさうであります からひとり軍人のみを惡く言ふ譯にはいけませぬが、自分の旅行中にも途中で色々五月蠅いことがあつて仕樣がなかつた。思ふに支那の軍人は苦力(クーリ)と擇ぶ所がない。苦力生活をして居る者が一度或る親方について使はれる。例へば波止場の運搬事業に引張り出されるとする。そうすると其親方からかねを受け取る。さうするとその親方に就いてゐる。偶々雇兵の募集でもあつて軍隊に行くことになる。そのときは兵隊になると言ふ丈のことで、苦力といひ軍人といひもと何等の別はない、要するに烏合の衆に過ぎないのである。といふやうに極めて無雜作に又露骨に批評する人があるが全く其通りであります。實際支那の武事の側はだらしがなくて吾々旅行者の眼に映じた範圍では甚だ物足りないやうに見えて仕樣がなかつたのです。それなら支那は文事の方で相當な見込が立つてゐるかといふと、此れ亦甚だ見込が立たないやうに思ふのであります。こは前に申したやうに所謂文弱に流れてしまつた結果でありますからして、是もどうも仕樣がない。此の點は文字を支那社會が餘りに重んじ過ぎたといふことが、大なる原因を爲してゐるのでないかと思ふのであります。

七　日本の社會に於ける文字の實際問題

以上支那社會と文字との關係からして玆に考へ合せなければならぬ事は、日本現在の問題であります。日本の現代社會では餘程文字を輕く見てゐる傾向があります。こは日本の國家全体の上から見て餘程良

い傾向であらうと思ふ。無論此の文字問題を輕々視することは一方からいふと宜いことではありませぬ。けれども、併し此文字に囚はれてまで國の進歩發達を犧牲にせんならぬとまでは日本人は考へてゐないのであります。詰り國が進む以上はそれに相應するやうに文字を改良して行かなければならぬ。日本人は一々口にこそ言はないけれども現在文字に囚はれずに行つて居る。それは皆樣御氣付でもありませう。支那人の文字に對する態度を見て居りますと、例へば机上で字を書く場合にどうするかといふに、先づ左の手を紙の上にピッタと置いて念の入つた筆の持方をして沈腕の姿勢で落ちつき拂つて叮嚀に楷書を一つ〳〵書く。一畫でも疎にしないやうに書いて居ます。所が日本人はさうでない。忙しい態度で机に向つたりなどして書いてはゐない。卷紙を持つて立ちながらスラ〳〵走り書きをして行くのであります。あの藝當には支那人は驚いて居る。迚も支那人の出來ませぬ術である。書きあげた結果は支那流の御世辞でもありませうけれども、立派な草書で讀めない位だと言うて居ります。事實支那人はアンな風に崩してしまふと讀めないのであります。支那人に遣る手紙は字は拙でも畫を正しく書いてやらぬと先方が閉口する。それ程に日本人の書き方は實用主義に出來て居る。それ丈に日本の社會は始めから文字をこなして掛つて居るのであると言ひ得る。今後はそれ丈で滿足せずに。小學校なり中學校なり、詰りすべての教育方面に向つて更に、今一層大きく言へば新聞なり雜誌なり總べての社會教育のものにも之を及ぼして行きたい。今日ではまだ文字の形が舊式の儘で使はれて居るのが大分あります。是は

書く方でなく、讀む方の文字に就いて云ふのであるが、舊式の形が今尙多く含まれてありますから、之を早く打壞して讀む所の文字をすべて書く方の字形に近づけ、讀む方の字も書く方の字も同一に現はれるやうになるべきものと思ひます。そは讀む方の文字から云ふと之には隨分要らない字が澤山あります。書く方の文字から云ふと假りに二千五百か三千あれば澤山であるのに、物を讀む爲めには五千も六千も知つて居らなければならぬと云ふことになつてゐる。少し支那の專門的の事を知るには八千か一萬位は知つて居らなければなりませぬ、書くのと讀むのと其處の差が餘りにひどい。實際に於いて支那の學問を專門に究める人でなければ三千以上は先づ要らないこと丶思ひます。所が舊式の方法でやかましく攻められると、讀む爲めの準備としては相當の數を覺へて居らなければならぬことになる。最近のやうに新聞の段數が十段組が十一段組になり大正八年一月からは十二段組になるのであります。さう云ふ風になつて來ると活字は益々小さくなる一方で仕舞には六號活字にまでに縮まつて行くだらうと思はれます。さうなつて來ると或一定の距離で新聞を讀むことになると、例へば五十歳以上の者は眼鏡無しでは「圓」と云ふ字、「團」と云ふ字、「園」と云ふ字などは殆ど同一字に見えて仕方がない。唯口構への四角の內にゴチャ〳〵と畫の多いものが入つてゐると云ふ丈しか判らなくなり、園、團、圓、の何れであるか分らぬことになる。孫に讀ませて父祖が之を聞いて行くと云ふことに結局なりはせぬかと思ひます。さう云ふことでは實用文字も甚だ不便でありますから、夫等は然るべく略字を使はなければならぬと思

ひます。此の點は支那人は夙に實行して居ります。例へば「圓」の字でありますと「円」是は日本と同じですが、それから支那に「圖」(図)、「園」(园)、此式の畧字を使つて居ります、日本でも此の式のもので澤山だと思ひます、併し色々文字を品よく書かなければならぬと云ふやうな場合丈には、今吾々の頭に去徠してゐるやうなむづかしい字を書けばよいのである。然らざれば何んだか人に對して失禮のやうな氣がします。けれども、將來は簡單な字で間に合ふやうになる。それが又正式の文字だと云ふ所まで漕ぎ付けなければ徹底しないのだと思ふ。支那は文字の中毒に罹つて今日の狀態になつた。必しもそればかりでもありますまいけれども、文字中毒が大なる原因を爲して居たと云ふことが言ひ得られるならば、日本は支那よりも書きかた並に假名の使用に於て支那以上に進めて居るが、更に今一層進歩させて、さう云ふ漢字の形式本位の妨になる事はすべて廢止して字數を少なくし又普通字の書を簡易にすること其點を大に改良しなければならぬのであります。羅馬字問題その他色々國字に就ての根本的問題のこともありますが、取敢ず先づ現在の文字をもう少し研究して支那式以上の略字を制定し、それが權威を持つと云ふ時代にまで進めて行かなければならぬと思ひます。それに就ては及ばずながら先輩の驥尾に附して自分も努力致したいと思つて居ります。是は日本の社會全體が其氣にならなければ始まらぬ問題でありますから、其點に就ては國民全体の自覺と努力を待たなければならないことゝ思ひます。